佐賀・城原三本谷南遺跡（じょうばるさんぼんだにみなみ）

1 所在地　佐賀県神埼郡神埼町大字城原

2 調査期間　一九九〇年（平2）一一月、一九九二年九月～一〇月

3 発掘機関　神埼町教育委員会

4 調査担当者　八尋　実・桑原幸則

5 遺跡の種類　河川または沼地（池か）跡

6 遺跡の年代　一一世紀～一二世紀

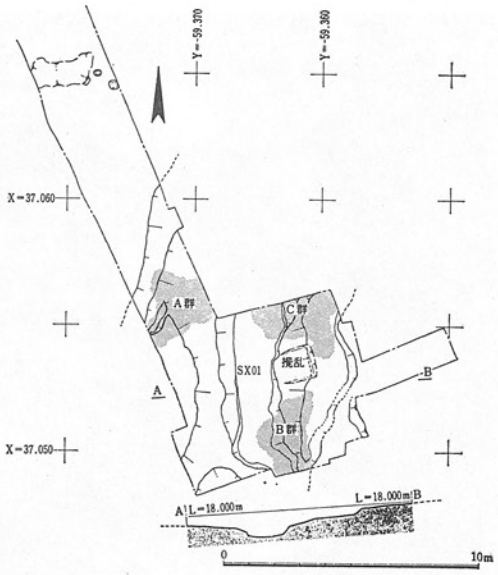
7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

城原三本谷南遺跡は、神埼町北部丘陵地帯に位置しており、北を城山（標高一九六m）等の脊振山系に、南を日の限山（標高一四八m）及びそれから派生する山塊に囲まれた標高一九mの谷部で、当地は現在水田として利用されている。調査地の南に隣接して菅生川が東流しており、すぐに神埼町のほぼ中央部を南北に貫いて南流する城原川と合流している。

（脊振山・佐賀）

城原三本谷南遺跡の調査は、平成四年度農業基盤整備事業に伴うものであるが、それに先駆けて事業の施工前の一九九〇年に当地の確認調査を実施した際、墨書が施された木製卒塔婆一一点などが出土し、周知外である当地における埋蔵文化財の存在が確認された。その後一九九二年度に事業が実施される際、隣接した位置に水路の設置が計画されたために本調査を実施することになった。

調査の結果、緩い落ち込みが確認されたために調査区を一部拡張して調査を実施したが、調査面積が狭いため、遺構の正確な内容など不明な部分が多い。検出された遺構は、小穴が少数と南北方向に延びる溝状（河川状）の遺構ＳＸ〇一、調査区の東外に広がる大規模な落ち込みなどがある。これらのなかで、ＳＸ〇一から多量の木製品や土器などの遺物が出土しており、調査区内の出土遺物の大半を占めている。この遺構は幅約九・五m、深さ約一・〇m（最深部）を測り、西・東の両岸より緩やかな傾斜で落ち込んでいる。その断面形はすり鉢状に近いが、底面が約一・〇mの幅で平たくなっている。埋土は黒褐色土や暗灰褐色土であり、下層は自然木などの植物遺体を多量に含み、上層はこれらの自然遺物に木製品や土器類などが混じっている状態であるが、自然遺物の包含量は下層に比べて少ない。下層からは自然遺物以外の出土は極めて少なく、これにより、この溝状の遺構がある程度埋没した後に木製品や土器類の廃棄（?）が行なわれていたことがうかがえる。



SX01全体図

出土遺物には木製品や土器類があり、木製品には、木簡や折敷、板、箸状木製品、棒の数箇所に切り込みを廻らせた脊椎状木製品、斎串、舟形、塔婆か法具を思わせるような木製品、蛇形木製品、杭などがある。土器類は、土師器の杯や小皿、黒色土器B類の椀や小皿、白磁椀などがあるが、土師器がその大半を占めている。これらの遺物は、溝状の落ち込みの岸の部分に多く認められ、北西部（A群）と南東部（B群）、北東部（C群）の三箇所に大きく分けることができ、それぞれに遺物の内容など異なった傾向が認められる。

8　木簡の釈文・内容

(1)「南无観世音苻」　140×22.5×2　061

(2)「〈南无得大□音□〔薩カ〕」　207×15×17　061

(3)「南无多□□〔聞天カ〕」　138×24×2.5　061

(4)〈南□□〔无大カ〕」　(174)×16×15　061

(5)「〈一一南无　(218)×25×3　061

(6)「〈□」　129×16×3　061

(7)「〈□」　197×18×16　061

(8)「□」　152×19×2.5　061

(9)「〈南无阿弥陀仏」　135×20×9.5　061

(10)「〈南无阿弥陀仏」　145×18×8　061

(11)「〈南无□□□□〔観音カ〕」　224×24.5×6　061

(12)「〈南无阿□□〔弥陀如来カ〕」　352×26×3.5　061

(13)「〈南无□」　364×17.5×3　061

(14)「〈南无光□□〔明真言カ〕」　296×22.5×4　061

(15)　「∨□〔南无ヵ〕□〔南无ヵ〕×　(75)×21×3　061

A群遺物出土状況

(16)　「∨南无□」　332×21×4　061

(17)　「∨□〔南无ヵ〕□〔南无ヵ〕大日真言　(175)×21×3.5　061

(18)　「∨□」　348×24.5×4.5　061

(19)　「∨南□〔无ヵ〕□」　347×24×5　061

(20)　「∨南无×　(50)×20×2　061

(21)　「∨南无□□真言　(214)×22×2　061

(22)　「∨南无阿弥□〔陀如来ヵ〕□」　340×15.5×4　061

(23)　「∨南□〔无ヵ〕大日□〔如ヵ〕来」　345×19×3　061

(24)　「∨南无大日如来」　337×27×4　061

(25)　「∨南无□□真　(70)×17×3　061

(26)　「∨□〔南无ヵ〕□〔无ヵ〕×　(63)×24×2　061

(27)　「∨南无□□」　(190)×18×4　061

(28)　「∨南无□」　(114)×16.5×3.5　061

(29)　「∨□〔南无ヵ〕□〔无ヵ〕」　352×19×3　061

(30) 「〈南无□□真言」 362×17×3 061

(31) 「〈南无大日□□」 355×24×3.5 061

(32) 「〈南无□□」 350×21×2 061

(33) 「〈南无□□」 344×14×3 061

(34) 「〈南无大日□」 345×26×4 061

(35) 「〈南□〔无カ〕□□」 (203)×20×3 061

(36) 「〈南无阿弥陀如来」 347×25×3 061

(37) 「〈南无□□」 358×17×3.5 061

(38) 「〈□」 330×21×3 061

(39) 「〈南无光〔明カ〕□〔真言カ〕□」 293×15×3 061

(40) 「〈南无□□□」 298×15×4 061

(41) 「〈南无大日〔真カ〕□言 (171)×22.5×4 061

(42) 「〈南无□」 (62)×(10)×1.5 061

(43) 「〈南无□□□ (66)×15×1.5 061

(44) 「〈南无□□□□」 285×19×4 061

(45) 「〈南无〔観世音菩薩カ〕□□□□」 361×20×5 061

(46) 「〈南无□世□菩□」 317×26×4 061

(47) 「〈南无大日□□」 297×22.5×3.5 061

(48) 「〈南无□□」 310×20×3.5 061

(49) 「〈南无妙法蓮華経」 345×22.5×4 061

(50) 「〈南无大日如来 (180)×20×4 061

(51) 「〈南〔无カ〕〔阿弥カ〕〔如カ〕□□陀□来」 295×21×3.5 061

(52) 「〈南无□□真言」 347×16×4 061

(53) 「〈□」 (172)×20×4 061

(54) 「〈南无光〔明カ〕□真言 (134)×18.5×2.5 061

(55) ×无大日如来 (147)×16.5×4 061

(56) 「〈(梵字)」 165×18.5×3 061

(57) 「〈(梵字)」 167×32×3 061

(58) 「〻(梵字)□」 150×26×3 061

(59) 「〻(梵字)□」 168×28×2 061

(60) 「〻(梵字)□」 152×24×4 061

(61) 「〻□」 (93)×23×3.5 061

(62) 「〻□」 261×24×5 061

(63) 「〻□」 (167)×27×5 061

(64) 「〻□」 224×24×3 061

(65) 「〻南无大悲観音　一」 (129)×21×3 061

(66) 「×无大慈観音　二」 (184)×21×3.5 061

(67) 「〻南无師子無畏観音　三」 200×21.5×3 061

(68) 「〻南无大光普照観音　四」 212×21.5×3.5 061

(69) 「〻□〔南カ〕无天人丈夫観音　五」 210×22×3 061

(70) 「〻南无大悲観音」 191×23×5 061

(71) 「〻南无大慈観音」 192×23×5 061

(72) 「〻南无天人丈夫観音」 215×20×6 061

(73) 「〻南无大梵深遠観音」 219×22.5×4 061

(74) 「〻南无□□観音」 216×23.5×2 061

(75) 「〻南无弥勒仏」 250×17×3 061

(76) 「〻南无阿□〔閖カ〕仏」 250×17×4 061

(77) 「〻南无大日如来」 250×19×3 061

(78) 「〻南无□□□観音」 207×20×5.5 061

(79) 「〻南无□□□」 250×29×4 061

(80) 「〻□」 (100)×14×2 061

(81) 「〻□」 266×22×3.5 061

(82) 「〻□」 272×37×4.5 061

(83) 「〻□」 199×25.5×17 061

(84) 「〻南□〔无〕阿弥□〔陀如カ〕来」 (183)×23×17 061

(85) 「〻□」 (88)×25×17.5 061

(86) 「∨南无□□」 167×17.5×15.5 061

(87) 「∨南无□□」 175×18×17 061

(88) 「∨南无□〔大カ〕□□」 158×17×17 061

(89) 「∨〔南无観世音菩薩カ〕□□□□□□□ (600)×41×41 061

(90) 「∨□□□□□ (400)×25×25 061

(91) 「∨□□ (420)×24×20 061

(92) 「∨南〔无カ〕□□」 233.5×23.5×22 061

(93) 「∨南无大□観世音　苄　」 166×16×5 061

(94) 「∨南无阿弥陀仏」 149×17.5×6.5 061

(95) 「∨南无妙法蓮〔華経カ〕□□」 150×19×3 061

(96) 「∨南无□□　苄　」 146.5×16.5×2.5 061

(97) ∨□□」 (208)×21.5×4 061

(98) 「∨□□ (236)×23.5×5.5 061

(99) 「∨□□ (180)×19×3.5 061

(100) 「∨□□」 229×29×4 061

(101) 「∨□□ (104)×17×4 061

(102) 「∨□□」 130×15×4 061

(103) 「∨□□」 149.5×13.5×2.5 061

(104) ∨□□ (84)×17.5×5 061

(105) 「∨□□」 163×25×2.5 061

(106) 「∨〔南无カ〕□□□□」 149×19×3 061

(107) 「∨南无観〔世カ〕□音〔苄カ〕□」 148×20×2 061

(108) 「∨□□」 157×28×3 061

(109) 「∨南〔无カ〕□□□」 227×29×2.5 061

(110) 「∨〔南无カ〕□□□□」 148×20×3 061

(111) 「∨南无十一面× (91)×21×2.5 061

(112) 「∨□□ (104)×26.5×2 061

(113) 「∨南无□□□ (91)×24×2 061

(114) 「〻南无□」 315×38×20 061

(115) 「〻□」 (400)×47×45 061

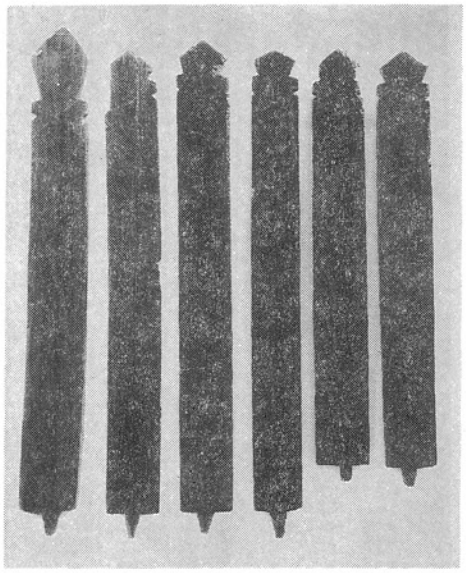
(116) 「〻□」 (620)×16×16 061

(117) 「□」 160×27×2.5 061

(118) ×〔観世カ〕□□」 (125)×14.5×14 061

(119) 「〻□」 126×11×4 061

(120) 「〻□」 (420)×19×15 061



(70) (71) (72) (73) (74) (11)

以上は全て卒塔婆と考えられる。これらの卒塔婆の出土位置は、(9)〜(55)がA群、(56)〜(91)がB群、(92)〜(116)(120)がC群からであり、(117)〜(119)は表土剥ぎ時の一括取り上げのため正確な出土位置は不明、(1)〜(8)は一九九〇年実施の確認調査時の出土である。なお、現時点では出土した木製品の整理作業は完了しておらず、ここに示した卒塔婆は完形や完形に近い状態、頭頂部を含む上半部の個体など個体識別が容易なものに限っている。これらのうち、調査の時点で取り上げ番号を付した個体については、その接合関係を検討しており、その結果ここで示した個体とは明らかに接合しない下半部の個体は、A群で一二個体、B群で二個体、C群で四個体、一括取り上げ分で五個体、一九九〇年の確認調査時の出土分で三個体ほど確認されている。ただし、現時点では一括取り上げ分の整理作業が完了しておらず、この中にも卒塔婆の断片が含まれているものと考えられるため、その整理作業の結果により出土した個体数に多少の変動は生じるが、少なくとも一三〇個体には及ぶものと考えられる。またこれらの卒塔婆の他に、絵のようなものが墨書された板（箱の断片か）が一点と、板を蛇がくねっているように加工し、その片面に目と鱗を墨書した蛇形木製品が一点出土している。

これらの卒塔婆は、板状の個体〔(1)(3)(5)(6)(8)(11)〜(82)(93)〜(114)(117)(119)〕と、断面形が円形・半円形・方形を呈する杭状の個体〔(2)(4)(7)(9)(10)(83)〜(92)(115)(116)(118)(120)〕の二種に大

別することができる。板状卒塔婆は、頭頂部が圭頭である点は全て共通であるが、その圭頭についても鋭角的な個体〔(75)〜(77)(97)〜(100)(104)(119)〕と、さほど鋭角的でない個体に分類できる。さらにこの圭頭の下に切り欠きが施されている個体と、施されていない個体〔(1)(3)(8)(117)〕があり、施されている個体についてはその切り欠きが一条〔(6)(12)〜(54)(79)(81)(93)〜(96)(110)(119)〕、二条〔(5)(11)(56)〜(62)(65)〜(78)(80)(98)〜(103)(105)〜(109)(111)〜(114)〕、三条〔(64)(82)〕の個体に分類できる。この中で、切り欠きが一条の個体については頭頂部が宝珠状に整形されている個体〔(12)〜(55)〕があり、三条の個体は上から二条目と三条目の間隔が大きく、正面形は板五輪塔婆に類似している。下部の形状は大半が先端を尖らせているが、これについても全長の真中付近から徐々に幅をせばめ先端で尖らせた個体や、先端部付近で急激にえぐるように尖らせた個体〔(1)(3)(12)〜(55)(105)(106)〕がある。また少数であるが、下端を平坦に加工しその中央にホゾ状の突起を削り出した個体〔(11)(70)〜(74)〕もある（前頁写真）。

杭状卒塔婆は、板状卒塔婆に比べてその出土数は少ない。その形態は、圭頭でその下に二条の切り欠きを廻らせ下部を尖らせた個体、施された切り欠きが一条である点以外は同様の形態の個体に分類できるが、前者については断面形が半円形を呈する個体〔(9)(10)〕、円形を呈する個体〔(86)〜(89)〕に、後者についても断面形が方形を呈する個体〔(92)〕、円形を呈する個体〔(2)(4)(7)(90)(91)(115)(116)(120)〕にさらに細分できる。これらのなかには復元すると五〇cmを超えると考えられる大型の個体〔(89)〜(91)(115)(116)(120)〕もあり、上半部（頭頂部から墨書が施される部分）と下部の尖らせていたと考えられる部分以外は枝落とし程度の加工にとどめられ樹皮がそのままになっている。これらの他に、少数であるが上半部の形態は前者と類似するが、下部を平坦に加工しその中央部にホゾ状の突起を削り出した個体〔(83)〜(85)〕もある。

このように、出土した卒塔婆は非常に多種に及んでいるが、これらは出土位置や形態、墨書の内容などにより、ある一定のまとまりが認められる。A群における(12)〜(55)は、法量や形態が非常に類似する一群であり、その多くが折り重なるような状況で出土している。B群においては、まず(56)〜(60)の五点が近接した位置からの出土であり、形態・法量が類似しているのに加え、墨書の最上部が梵字である点で共通している。(65)〜(69)の五点は近接した位置からの出土であり、形態・法量が類似しているのに加え、墨書の末尾に一〜五の数字が記されており、これらが一つのセットであることを示している。(70)〜(73)の四点についても近接した位置から出土し、形態・法量ともに類似しており、前述の(65)〜(69)と同様の内容が墨書されていることより、これらも一つのセットと考えられる。これらの他にもB群においては、(75)〜(77)の三点、(83)〜(85)の

三点、(86)〜(88)の三点が、やや離れた位置からの出土であるが形態・法量ともに類似するものであり、セット関係が想定できる。C群においては、(93)〜(96)の四点、(97)〜(100)の四点、(101)〜(103)の三点（この他に同様の個体と考えられる下半部の断片が二個体分あるため合計五点分）などが、出土位置や形態・法量などによりセット関係を想定できる。

これらの卒塔婆に施されている墨書の内容は、阿弥陀如来や大日如来、観世音菩薩などの諸尊や法華経、真言などの上に「南无」を冠した名号や題目のみであり年紀や人名などは認められない。その墨書については、明瞭に遺存している個体は少なく、墨書は消失しているがその痕跡が浮き上がっている個体が多い。このなかで、(65)〜(73)の「南无」と「観音」の間に「大悲」「大慈」「師子無畏」「大光普照」「天人丈夫」「大梵深遠」の語句が挟まれている点は注目される。これらは『摩訶止観』第二上にみえる天台宗において六道の救済のためにあてられる六観音の尊称と一致しており、さらに(65)〜(69)における末尾の一〜五の番号は、この六道（地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天）のうちの地獄〜人の五道の順番と一致している。

これらの卒塔婆の用途については、本体に釘などが刺された個体は認められず、下半部を尖らせた個体が大半を占めていることより、これらは地面に突き立てて使用されていた状況が想定でき、(11)(70)〜(74)(83)〜(85)のような下端にホゾ状の突起が削り出されている個体については、板や棒などに穴を穿ち、そこにホゾを挿入して立てていたものと想定される。これらは、『餓鬼草紙』や『北野天神縁起』などに見られる卒塔婆と比べてその法量がかなり小さく、墓標としての用途は考え難い。むしろ墨書の内容に阿弥陀如来や六道救済観音、光明真言などが比較的多く認められる点より、追善回向や逆修等の供養に使用された色合いが強く感じられる。これらの卒塔婆は、下半部付近で折れたり曲がった個体が多く認められるが、これは引き抜く際に生じたものと考えられ、出土した卒塔婆は供養などの行為が終了した後に廃棄されたものと考えることができる。

このような卒塔婆と共に折敷や箱（出土した板は法量が卒塔婆と類似している他、木釘の刺されたものやその痕跡が認められるものが多く、箱などが損壊したと考えられる個体が多い）などの容器や土器類、その他の木製品などが出土しており、その内容から、供養などの行為に使用された卒塔婆を廃棄する際、容器に納められたものがあったことが想定される。特にA群においては、多数の卒塔婆や箸状木製品・土師器小皿などが折り重なっているが、その折り重なりの一部に箱と考えられる板が被さっており、箱と考えられる容器に納めて廃棄されたものが、水流など何らかの理由により位置を移動したことが想定される。このA群における卒塔婆・箸状木製品・容器・土器類といった組み合わせは、B・C群における卒塔婆・脊椎状木製品・容器・土器類・その他といった組み合わせとほぼ共通するものである。

ただ、B・C群においては容器と考えられる折敷や板の出土数が多く、卒塔婆についても、A群では類似する形態や法量の個体が大半を占めるのに対し、B・C群では類似する形態や法量の個体に三〜五点程度のまとまりが多数認められる点で相違がある。このような出土遺物の傾向より、この場所が供養などに使用したものの廃棄にあてる空間であり、継続的にこのような廃棄行為がなされていたことがうかがえる。その廃棄にあたっても容器に納めるといった状況や廃棄に際する祭祀行為がうかがえる土器類などの出土などにより、単なる不用物の廃棄ではなく、この廃棄行為をもってその供養が終結するいわば締めくくりのようなものと考えることができる。

以上のように今回の調査で出土した遺物は当時の供養の一端をうかがう上で良好な資料となり得るものであるが、現時点ではこれらの遺物の整理作業は完了しておらず、卒塔婆に記された墨書についても肉眼による判読しか実施していない。今後赤外線などによる判読作業を実施する必要があり、それによりさらに詳細な検討が可能になるものと考えられる。また、調査範囲が非常に狭いため遺構の正確な内容は不明であるが、少なくとも今回の調査において、調査区の四方に遺構の広がりが想定でき、今回の調査地点は一九九〇年に実施した確認調査の位置とはやや異なっているものと考えられる。これより、この付近は広範囲にわたり同様の目的に利用されていたことが推測される。

なお、これらの木簡の墨書の内容や遺物の解釈について奈良大学の水野正好氏、木下密運氏、広島県立歴史博物館の志田原重人氏にご教示いただいた。

9　関係文献

神埼町教育委員会『城原二本谷西遺跡・城原三本谷北遺跡・城原三本谷南遺跡―概報―』（神埼町文化財調査報告書第三五集　一九九三年）

神埼町教育委員会『城原三本谷北遺跡・城原三本谷南遺跡―概報―』（神埼町文化財調査報告書第三六集　一九九三年）

桑原幸則「佐賀県神埼町大字城原に所在する仏教祭祀遺跡―城原三本谷南遺跡の調査―」（『日本歴史』五四五　一九九三年）

（桑原幸則）